

# 平成30年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表

「評価」及び「総合評価の評定」の基準

A：十分達成できた

B：概ね達成できた

C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標① 多様な進路に応じた人材育成 一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、学生個々の進路やニーズに対応した教育を行い、生涯にわたる社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する。</p>		<h2 style="margin: 0;">総合評価</h2> <h3 style="margin: 0;">B</h3>	<p>(所見) 進路希望実現に向け、「農大進路指導計画」に基づき、進路希望調査と資格取得希望調査を定期的に実施することにより、進路希望を把握するとともに、進路意識の向上を図った。卒業生の94%が進路を決定し、うち1名が国立の、1名が私立の四年制大学へ編入した。1年次生については、学年末の段階で100%の学生が希望する職種を確定できている。</p> <p>平成26年度より授業評価を導入し、確かな学力育成のために教職員が授業改善に取り組んでいる。レジュメやICT機器を活用して視覚的理解を促すなど、わかりやすい授業の実践に努めた。</p> <p>いじめ問題をはじめとする学生の心のケアに関しては、「大学校いじめ防止基本方針」に基づく「いじめの発見のための観察ポイント」を活用し、学生に問題が無いか定期的に確認すると同時に、教職員自らの人権感覚を磨いた。学生には、「学校生活に関する調査」を年2回実施し、気になる回答があれば面談等を行い、問題の早期発見に努めた。</p> <p>自主・自律性の醸成と仲間づくりに関して、学生自治会主催の各行事や模擬会社「そらそうじゃ」での販売活動を通して、学生が主体的に考え、実施し、改善案を出し合い、次につなげていく、PDCAサイクルが実践できている。野球、バレー、バトミントンの3種目で準優勝を獲得した四国農学連スポーツ大会では、チーム内で励まし合いながら、最後まであきらめずにプレーする清々しい姿が見られる等、学生同士の団結力の強さを感じる事ができた。</p> <p>課題としては、大半の学生の進路決定が夏休み以降になっている点が挙げられる。進路担当者やクラス担任だけ指導に当たるのではなく、プロジェクト担当教員なども連携して、早めに就職活動を促していく必要がある。また、自治会やそらそうじゃの活動に積極的に参加している学生がいる一方で、アンケートでは否定的回答が2割を超えることも課題と言える。学生の熱意に多少のばらつきがあるのは避けられないことではあるが、可能な限り学生一人ひとりが満足感や達成感を味わえ、積極的に関わりたいと思えるような体制作りが望まれる。</p> <p>以上の観点から、「多様な進路に応じた人材育成」に係る総合評価をB(概ね達成できた)とした。</p>						
課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況		評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題	
①	キャリアプランニング(将来設計)能力の育成	1	進路希望調査、三者面談、進路相談会等を実施し、一年次生のうちから学生に早期の進路決定意識を醸成させ、進路決定を支援する。	個人面談を年間3回以上実施し、1年次の後期開始時点での進路目標決定者を90%以上にする。	進路指導計画に従って、進路希望調査を4回実施した。後期開始時点となる第3回調査(1月9日実施)では、進路目標決定者は100%であった。	A	A	学生の目指すべき方向性が定まっていることが学校生活に対する満足度の高さにつながっている。	就職活動の3月1日解禁と同時に、就職希望者全員が就職活動を始めるような働きかけを確実に実施する。
	2	公共職業安定所や人材育成会社と連携したキャリア教育を推進する。	1年次後期から2年次前期にかけて、公共職業安定所と連携した進路ガイダンスを2回以上実施する。2年次では人材育成会社によるキャリア教育を2回以上実施する。	1年後期と2年前期に公共職業安定所と連携した就職ガイダンスを実施し、2年後期には徳島県すだちくんハローワークと連携して就職未決定者に対する就職ガイダンスを実施した。また2年次生には人材育成会社によるキャリア教育の講義を2回実施するとともに、県法人化協会との連携により、2年次で農業生産法人との交流会を開催し、各生産法人毎にブースを設け会社説明を聞いた。進学希望の学生には、専門科目の補習や論文作成、面接指導を行った。	A	農大の学生は、就職活動のスタートが遅れる傾向があるため、就職ガイダンスに加え、早期の就活セミナーへの参加などを指導する。県農業法人協会との交流会は就職先を考えることができるよい機会であるため、今後も実施する。			

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題	
② 個々のニーズに基づいたマンツーマン指導の充実	1	学生に基礎的・基本的知識を確実に習得させ、学力向上を図る。	職員の授業改善に係る肯定的評価を90%以上にする。 講義で行われる教養科目・専門科目、それぞれの不認定者数を10%未満にする。	職員の授業改善に係る肯定的評価は100%であり、各教職員が学生に基礎的・基本的知識を習得されるため、各自が授業改善を図ったが、講義3科目において不認定者が10%以上になった。	B	B	高校では生徒に主体性を持たせるのに苦勞するが、年齢が上がるにつれ主体性が芽生えてくるのに加え、農大では学生の多様な目標に対応するために、面談などを通して漠然とした個人の希望を具体化する過程に時間を割いており、これが主体的な取り組みにつながっているように思われる。	講義2科目において不認定者が10%以上になったことから、この2科目については、次年度に向けて改善に努める。
	2	進学希望者には、「進学対応カリキュラム」により、学力向上を支援する。特に編入学試験等で必要となる英語・小論文・口頭試問においては、補習や個別指導を行う。	学生アンケートを実施し、「進学対応カリキュラム」と「個別指導」の有意義性に対する肯定的評価を80%以上にする。	補習授業と個別指導の有意義性に対する肯定的評価は85.2%であり、目標を上回った。しかし、進学科目については、外部講師が多く、補習授業、個別指導が実施しにくく、内部の教職員が分担して実施した。	B		次年度も内部の教職員で分担し、その指導の効果をさらに高めるよう努める。	
	3	就職希望者には、就職セミナーやガイダンス等の実施により、早期から就職活動意欲の醸成を図る。また、1年次より就職補習を定期的に実施し、基礎学力の向上を図ると共に、履歴書やエントリーシート等の作成を支援する。	就職セミナー、ガイダンス等を年間2回以上実施する。 2年次生を対象に、「履歴書の書き方講座」、「面接対策講座」を開催する。 就職補習に対する学生の肯定的評価を80%以上にする。	就職ガイダンスを年間2回実施した。6月には農業生産法人との交流会に参加し、就職活動意欲の醸成を早期から図った。就職ガイダンスの中で履歴書の書き方と面接対策について講義を開催し、その後実際に履歴書を作成し、添削し指導した。就職補習に対する学生の肯定的評価は85%であった。	A		就職ガイダンスは引き続き、年間2回以上実施する。「履歴書の書き方講座」と「面接対策講座」については進路担当教員だけでなく、各コース担当教員とも連携を図る。	
	4	学生のニーズに対応した資格取得特別講座を開催し、資格取得を支援する。	造園技能検定、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、日本農業検定、フォークリフト、わな猟免許、家畜人工授精師等に係る特別講義を開催する。学生の80%以上が特別講義を受講する。	「自分の進路や希望に応じて、資格取得特別講座を受講し、資格試験にチャレンジした」と回答した学生は88%であった。また、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、フォークリフト、農業技術検定、土壤医検定、狩猟免許等の特別講義を開催した。	B		受講率は上昇したものの合格率はまだ低いため、今後とも資格取得講座の改善と演習の充実を図り、特別講座受講率及び合格率の向上を図る。	
	5	2年次生一人ひとりの進学・就職活動に向けて、面接・マナー・口頭試問等の個別指導を実施する。	面接・マナー・口頭試問の指導を充実するため、受験レポートを分析、作成した「就職試験受験報告書」、「就職試験でよく聞かれる質問集」、「就職試験面接指導マニュアル」の充実をはかり個別指導に活用する。 年度末の進路決定率を90%以上にする。	就職試験受験報告書などを活用し、可能な限り全員に個別指導を行った。3月8日現在で、進路未決定者は2名で、決定率は94%である。	B		1年次生の就職希望者には、3月1日の就職活動解禁日までに第1希望就職先用の履歴書を完成させる。	

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
③ 高度情報化への対応とコミュニケーション能力並びに問題解決能力の育成	1 現在のパソコンにおいて事実上の「標準」となっている「Microsoft Office」の各ソフトウェアを活用できる能力を育成する。 実習や模擬会社の運営において、スマートフォンやタブレット等の情報端末の活用を推進する。	学生アンケートで情報活用能力に関する自己評価を実施し、ワード、エクセル、パワーポイントを活用できる学生を90%以上にする。	「ワード、エクセル、パワーポイントなどの基本的な使い方を習得できた。」という項目に肯定的回答をしたものが、1年次生では90%、2年次生では96%であった。また、「学習や体験したことを分かりやすくまとめ、パワーポイントなどを用いて説明することができた。」という項目に肯定的回答をしたものが、2年次生は96%（1年次生は調査対象としていない）であった。	A	A	定期的にプロジェクトの進捗状況をまとめて発表することで、各自が直面している課題が自覚され、より積極的な取り組みにつながれていると思う。	情報端末が情報発信手段としてはまだ十分に活用されておらず、今後積極的な活用の指導が課題となる。
	2 プロジェクト学習における計画段階から調査・研究に至る一連の取組や、それらの成果や課題をまとめ、発表する機会を設定することにより、正確かつ的確な情報伝達能力、並びにプレゼンテーション能力を育成する。	コース内で、プロジェクト学習の進捗状況を発表する機会を、年間3回以上設定する。 学校行事として各種プレゼンテーションの機会を3回以上設定する。	コース内で、プロジェクト課題解決学習の進捗状況を発表する機会を、年間3回設けた。 また、学校行事として各種プレゼンテーションの機会を4回設けた。	A			次年度についても継続してプロジェクト課題解決学習に対する意識をさらに高めるとともに、プレゼンテーション能力のさらなる向上を図る。
	3 ワークショップやグループ活動等、知識を相互作用的に活用する機会を授業や実習に取り入れ、言語活動を活性化させることにより、思考力・判断力・表現力等を育成する。	コース演習の30%以上を、話し合い、討論、ワークショップ等の言語活動に充てる。	各コースとも、コース演習の時間の大半（8～9割）をプロジェクト進捗状況の報告、農大祭の出し物や販売物に関する話し合い、各種発表会の準備や練習などに当て、実践的な言語活動を行った。	A			これまでの取り組みに加えて、学生自身が現在の課題や改善すべき点を見つけ、話し合いなどを通して主体的に問題解決や現状の改善に取り組んでいく姿勢を育む。

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
④ 体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成	1 学生実習やプロジェクト学習を「そらそうじゃ」の業務や商品開発と一体とみなし、各業務担当ごとの実践的な運用手法を策定し、組織的に指導助言できる体制をつくる。	「徳島農大そらそうじゃ」の業務担当単位で活動する時間を、月1回以上確保する。策定する運用手法に対する学生と職員の肯定的評価を80%以上とする。	学生アンケートを2回実施した。業務担当者会を年間10回実施するとともに、業務担当者会に1年次生も回数多く参加できるようカリキュラムを工夫した。運用手法に対する評価では学生、職員共にほぼ80%以上の肯定的評価であった。	A	A	H30年度は台風の影響などでそらそうじゃの売り上げが落ちたとのことだったが、ここ数年は売り上げを伸ばしてこれているのはすごいこと。 あくまで教育機関ではあるが、経費を含むトータルの損得勘定を学生が意識できるようにするのも大切と思う。 一部の学生が参加する県外研修の報告会を行い、研修で学んだり感じたりしたことを他の学生とも共有できているのは素晴らしい。	業務担当者会の年間12回の開催を行うとともに、1年次生の参加を5月から行い各担当ごとの協議を充実する。
	2 模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」の運営や活動を通して、個人の責任や協力を重んじる態度や姿勢を農業大学の文化として定着させる。	学生アンケートを実施し、模擬会社活動における「責任感」や「協力」等に関する肯定的評価を90%以上にする。	学生アンケートを2回実施した。きのべ市や出張販売等において店長等の役割を明確にして活動を行った。活動に対する評価では、1年次生90.5%、2年次生96.3%の評価であった。	A		各担当課毎の協議を充実することにより、模擬会社内での責任感や積極的に協力する意識の向上に努める。	
	3 「徳島農大そらそうじゃ」の活動や「きのべ市」の開催に関する広報活動を積極的に行い、「きのべ市」の知名度向上とファンの増加を図り、来店者の増加を目指す。	「徳島農大そらそうじゃ」HPとフェイスブックの中で、「きのべ市」の開催案内や模擬会社の活動状況及び成果を月に3回以上の情報発信ができるように取り組む。	HPでの開催案内が11回、Facebookでの活動状況発信を36回(3/6現在)実施し合計47回の情報発信であった。キョーエイ石井店での出張きのべ市等により新規来店者数は増加した。	A		Facebookでの活動情報発信をさらに充実するとともに、他の情報発信手段も検討し情報発信力を強化する。	
	4 学生の研究課題や進路に対応した校外での「農業体験学習」を実施し、研修先での職業体験を通じて、実践力や人間関係能力を育成する。	学生が積極的に農業体験学習に参加し、知識や技術等の実践力を身につけたかを調査する。それらの肯定的評価を90%以上にする。	2年次生全員が4回(20日)以上の農業体験学習に参加し、報告書の提出状況も良好であった。 提出された報告書の内容から、多様かつ充実した研修内容であり、学生の知識や技術等の実践力修得に有効であったことが窺われる一方で、学生自身による「体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成」の肯定的評価は90%に満たなかった。なお1年次生はコース再編の趣旨を踏まえた、より実のある体験学習とするため、農業生産技術コース生は農業体験学習、6次産業ビジネスコース生は6次産業体験学習として実施しており、後者は食品産業や流通業界等における体験学習を実施している。	A		全ての受入農家を訪問し、学生の研修態度の確認や情報交換を行ったところ、多くの受入農家で学生の研修態度について良好と評価していただき、これまでにあった受け入れ先からの「積極性に欠ける」等の研修態度の改善要望をいただくこともなく、真摯に臨む姿勢がうかがわれた。 今後は食品産業や流通業界等の幅広い分野における体験学習を設けられるよう関係団体等との連携を進めていく必要がある。	
	5 「農業体験学習」に係る報告書作成や成果発表会等の活動を通じて、学生の気づき、発見、成果と課題等を共有させる。	事前・事後の指導を徹底すると共に、報告書作成に係る個別指導をしっかりと行い、成果発表会の不合格者数を0にする。	受入農家の経営状況の把握や研修内容の記録、データの整理方法の事前指導、研修後の報告書作成・提出期限遵守等の事後指導を徹底した結果、学生の肯定的評価は94.6%と高くなり、農業体験学習発表会においても、不合格者0という成果に繋げることができた。	A		各学生が研修に明確な目的をもって、積極的な姿勢で臨むことで、より充実した研修となるよう指導していく必要がある。	

課題		活動計画(具体的方策)		評価指標(数値目標)		評価指標の達成度と活動の実施状況		評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
⑤	特別活動・課外活動の活性化による自主・自律性の醸成と仲間づくり	1	学生のサークル活動や自治会活動を充実させ、活力のある学生生活を支援する。	農大祭においてサークル活動や自治会活動の成果を展示する。農学連スポーツ大会への全種目参加、ならびに競技の運営協力を通じ、他県の学生と交流を深める。	農大祭の青果物販売のレジ待ち通路にGOGO農大3年分を展示しサークル活動や自治会活動について展示をした。農学連スポーツ大会への全種目参加、ならびに競技の運営協力を通じ、他県の学生と交流を深めることができた。他方、学生アンケートでは自治会やサークル活動に積極的に取り組んだ割合は75%にとどまった。	B	B			サークル活動や自治会活動を充実させるとともに、学生が成果展示物等を作成する時間確保や手法の習得を支援する。	
		2	学校行事(剣山登山、農大祭、収穫祭、スポーツ大会等)を活性化させ、積極的な参加意識を醸成するとともに学生間の仲間づくりを支援する。	各学校行事の事後アンケートを実施し、学生の満足度を80%以上にする。	各学校行事の事後アンケートを実施し、学生の満足度を89%とすることができた。	A				今後も引き続き学校行事の充実に努める。	
課題		活動計画(具体的方策)		評価指標(数値目標)		評価指標の達成度と活動の実施状況		評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
⑥	積極的な教育活動の改善並びに学校運営の改善	1	定期的に課長会、コース会等を実施し、学生の学習や生活について情報交換をし、教育課題の設定並びに指導の標準化を図る。高等学校との連絡・連携を密にし、学生の生活指導や教育活動の改善に活かす。	課長会を月1回以上、コース会を月2回程度実施する。組織アンケートを行い、学生の理解を深める情報交換や組織力等に係る職員の肯定的評価を90%以上にする。	課長会開催回数は、時間を捻出し昨年より2回多く開催できた。各コース会も月2回程度実施した。学生の学習状況や生活状況について情報交換を行い教職員間で共有。また、学生指導について指導方針を協議しながら共通認識とした。このようなことから、今年度はすべての教職員が、積極的な教育活動及び学校運営の改善向上がされたと感じている。	A	A	学校評価アンケートや授業評価アンケートがしっかりと実施され、結果も細かく分析されている。大変なことではあるが、各授業や学校全体の改善には大きく貢献していると思う。	A	学生の状況や個々の教職員の教育活動についてより共有し、より透明性の高い学校運営に努める。	
		2	定期的に、学校教育目標に基づく具体的な取組のモニタリングを実施し、指導の進捗状況や適切さを評価する。	学校の組織化と職員の協働意欲の高揚を図るため、課長会において、コースや校務の取組やその課題について共有する場を設定し、体制の維持・発展を図る。また、指導の進捗状況を適切に評価するため、校務分掌やコースの業務に関するモニタリングを年2回実施する。更に、外部評価も行うこととする。	課長会での積極的な情報発信や教育活動及び学校運営上の諸問題への取組みについても、教師全員が課題について認識し、改善に努力していると回答があった。また、外部評価委員会において、今年度からのコース再編を含めた農大の教育体制は高く評価された。	A				学校評価結果を活かした目標を設定し共有することにより、協働体制を推進する。教職員間の連絡体制を密にし、意欲を持って学校運営に参画できる雰囲気をつくる。	
		3	課長会において、最新の教育事情、学生指導、危機管理、コンプライアンス等に関する研修を継続的に実施し、教職員の資質向上を図る。	課長会において、教育指導改善や学校運営改善につながる研修(勉強会)を継続実施する。	昨年に引き続き、課長会において学生指導、授業改善及びコンプライアンス等の研修を開催し、教職員の資質向上を図った。	B				成果があった指導や研修等は、課長会で発表するなど学校全体で共有化する。	

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
⑦ 心の通う人間関係を構築する能力の素地養成	1 学生間の人間関係におけるいじめなどを早期発見し、対応する教職員組織をつくる。	「いじめ発見のための考察ポイント(教員用)」を、年2回教職員で確認し、問題点があれば速やかに対応する。	年間計画に従い、6月と11月に、「いじめ発見のための考察ポイント(教員用)」を教職員で確認した。いじめの枠組みにとらわれず、悩みを抱えていそうな学生などに関しては、職員会で共通理解を図り、必要に応じて学生と面談を行うなどして、心理的なサポートにも努めた。 10月と2月に実施した学校評価アンケートにおいて、「授業や実習や行事を通じて、学年の人権意識を高めるよう努めた。」と答えた教員は、どちらも100%であった。	A	A		「大学校いじめ防止基本方針」に基づき、いじめを許さない教職員組織づくりに努め、「いじめ発見のための考察ポイント(教員用)」を活用して人権意識の高揚を図っている。次年度以降もさらに高い段階の組織づくりに努める。
	2 学生ひとりひとりの人権意識を醸成し、学生間での人権意識の共存を確立する。	学生に「学校生活に関する調査」を年2回実施し、問題がある回答を記載した学生およびその関係する学生に、面談を通して聞き取りをし、必要な対処をする。	年間計画に従い、6月と11月に、「学校生活に関する調査」を学生に実施し、「いじめ相談と心の相談の主な機関の一覧」を配布した。調査において気になる回答をした学生には面談を実施し、その結果、問題はなかった。また、10月と2月に実施した学校評価アンケートにおいても、「人権を大切にする仲間づくりができた。」と答えた学生は、10月で83%、2月で96%であった。	A			「大学校いじめ防止基本方針」に基づき、普段の授業や実習を通していじめを許さない仲間づくりに努めるとともに、「学校生活に関する調査」等を活用し、表面化しにくい心の声にも耳を傾けるよう努めている。次年度以降もさらに学生の人権意識が醸成されるよう努める。
	3 より多くの関係者が学生の悩みや相談を受け止めることができるようにするため、学校と家庭が組織的に連携・協働する体制を構築する。	保護者が来校する三者面談等の機会をとらえて、「いじめ発見のための考察ポイント(保護者用)」を保護者に配布と説明をし、保護者がいじめを早期発見できるようにする。	1年次生の保護者には4月、2年次生の保護者には5月の三者面談にて、「いじめの発見のための観察ポイント」および「いじめ相談と心の相談の主な機関の一覧」を配布・説明すると同時に、学生に関して気になることがあれば、いつでも学校に相談するよう訴え、連携強化を図った。	B			三者面談で「いじめ発見のための考察ポイント(保護者用)」を配布し、説明することで、心配な点があれば相談しやすい環境ができていく。次年度以降も学校と保護者の連携をさらに密にし、学生の悩みに早期対応できるように努める。

本年度の重点目標② 地域農業への寄与  
農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。

## 総合評価 A

(所見) 生産技術コースでは、「栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成」を課題とし、年間を通して多種多様な果樹・野菜・花き・畜産を扱うことにより、学生の栽培管理における知識・技術の習得を支援した。学生プロジェクト11課題のうち6課題において、家業を含む地域農業の諸課題を検証・改善した。卒業生11名のうち、自営及び就職就農は5名、関連企業への就職は4名となった。

地域資源活用コースでは、「多様な地域資源を活用できる人材の育成」に取り組み、「みまからとうがらし」「阿波番茶」等、本県の特長ある地域資源を用いた加工や販売について学んだ。プロジェクト学習で消費者アンケートを実施するなど、消費地の意見をフィードバックさせ、次のステージへ繋げる意識の高まりが見られた。

アグリビジネスコースでは、「地域農業の振興につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成」をテーマとし、プロジェクト学習では、PDCAサイクルの実践を指導するとともに出張きのべ市等の機会等において消費者ニーズを把握しつつ加工品の商品化に取り組む等、新たなビジネスモデル創出に向けた活動を推進した。

農業生産技術コースでは、これまでの生産技術コース同様、「栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成」を課題として、学生の栽培管理における知識・技術の習得を支援した。学生プロジェクト12課題のうち、10課題において、家業を含む地域農業の諸課題を検証するための課題設定を行った。

6次産業ビジネスコースでは、実習を通じて農業技術の基礎を学ぶとともに、プロジェクト課題設定に際しては、コース演習等において様々な6次化の事例等も示しながら、新たなビジネスモデル創出を意識するよう誘導した。

学校からの情報発信に関しては、引き続き「学校HP」、「そらそうじゃHP」、「そらそうじゃFacebook」、「GoGo農大」などにより継続的な情報発信に努めている。

以上の観点から、「地域農業への寄与」に係る総合評価をA(十分達成できた)とした。

課題		活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
①	栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成  (生産技術コース)	1 栽培・飼養管理についてプロジェクトを通じて、栽培・飼養管理の実践することにより、体系的・実践的な農業の知識並びに技術を習得させる。また、先進的な栽培方法について知見を深める。	学生の栽培・飼養に関する知識及び技術を習得して、それぞれがこれまでの経験に基づく農業の課題解決に努め、生産技術の向上につながるプロジェクト課題を80%以上設定する。	栽培・飼養管理について、プロジェクト課題を学生の今後の進路を想定して実施した。研究部門との連携により、年間を通じて実践した。そのことにより、農業技術を習得することに努めた。	A	A		
		2 プロジェクト以外で、「農大祭」や「きのべ市」で販売する野菜や加工品、花苗等の栽培方法、利用方法等について学習する時間を設け、十分な知識を習得させる。	学生の農作物に対する栽培・貯蔵・流通・販売等に関する知識や経験を深めるために、生産現場の視察研修や実践を授業時間を活用して実施し、理解度を80%以上とする。	「農大祭」、「きのべ市」で販売する果実、野菜、花きの栽培や加工品等の生産、各農業生産現場の視察研修等を授業時間を活用して実施し、技術習得に努めた。	A			
		3 プロジェクトに基づいて、「生産・販売計画」を作成、地域の特色を活かした作目の課題解決のための高度・専門的な栽培・飼養技術を実証するとともに、農業経営についての考察を行う。	地域に貢献できるような課題解決についてのプロジェクト成果について選抜し、その情報を地域社会に様々な手段により、発信する。	地域に貢献する課題解決プロジェクトについて学生が取り組み、農大HP、センターニュース、石井CATVにそれぞれ1課題発信し、外部からの技術指導の要請に応えた。	A			

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見
② 多様な地域資源を活用できる人材の育成 (地域資源活用コース)	1 地域資源を活用した先進事例や地域の地域資源に関する情報提供を積極的に行い、プロジェクト活動への取り組みに活かす。	教員から情報提供を行うと共に学生の発表機会を年間4回以上持つ。	藍住農業支援センターや吉野川農業支援センターへ向向き、現地調査を行い、プロジェクト活動の方向性と課題設定への取り組みを支援した。	A	A	見たり食べたり、実際に体験したことは強く印象に残るので、みまからアイスはずいぶん辛いにしてインパクトのあるものにしてほしい。
	2 地域資源を活用した加工・販売の先進産地や市場の視察研修を実施し、最前線の情報をダイレクトにプロジェクト活動に活かす。	先進地での校外研修を年間2回以上実施し、学生の自己評価において、当該活用技術の理解度を80%以上にする。	大阪市場や神山町にて現地調査を行い、理解度を88%とすることができた。	A		
	3 香酸柑橘「阿波すず香」の加工品の商品「阿波すず香胡椒」等について検討を重ね、品質を高める。 唐辛子を用いた加工品の検討と試作を行う。 鳴門わかめの未利用部分を農業生産へ活用する手法を検討する。	香酸柑橘の加工品の品質改善または商品開発を行う。 唐辛子を用いた加工品1品目以上の商品開発を行う。 鳴門わかめ未利用部分の活用方法の案をつくる。	香酸柑橘加工品の品質向上には至らなかったが、みまから唐辛子の商品開発(みまからアイス)を行った。 鳴門わかめに加え、漁業で問題となっている海藻ホンダワラの堆肥化による活用について案を作成した。	B		
③ 地域農業の振興につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成 (アグリビジネスコース)	1 学外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や社会のニーズを把握、分析させ、商品開発や販売戦略等に活かす。	市場ニーズの把握に取り組んだ学生プロジェクトを50%以上とする。	コース所属の2年次生14名のうち90.9%が市場調査やインタビュー等により消費者ニーズや意見の把握に努めたプロジェクトを進めたと回答した。 実際に多くの学生が模擬会社そらそうじの販売研修等に消費者アンケートを実施する、プロジェクトに関連する農産物の産地に赴いて関係者との意見交換を行う等の取り組みを実践した。	A	A	
2 コース実習、卒業論文等の課題解決の過程に「プロジェクトマネジメント」、「ブレインストーミング」等の各種の手法を習得させる。	1つ以上の課題解決のための手法を利用できるようになった学生を80%以上とする。	コース所属の2年次生14名のうち90.9%がプロジェクトマネジメント等の手法を一つは取得できたと回答した。	A			
3 学生のプロジェクトにおいて、「6次産業化」を視野に入れた新たな農業ビジネスモデルを研究・実践し、成果を卒業論文に盛り込む。	「6次産業化」を視野に入れたプロジェクト研究に取り組んだ学生を50%以上とする。	コース所属の2年次生の14名のうち72.7%がプロジェクト活動において「6次産業化」を視野に入れた取り組みを行ったと回答しており、本校農産物を活用した「農大定番商品」を23品目商品化する等の実績を残した。	A			
④ 栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成 (農業生産技術コース1年次)	1 栽培・飼養管理について役割分担し、日々の栽培・飼養管理を主体的に実践させ、年間を通じた体系的・実践的な農業の知識並びに技術を習得させる。また、先進的な栽培方法について知見を深める。	学生が栽培・飼養に関する知識及び技術を習得して、それぞれがこれまでの経験に基づく農業の課題解決に努め、生産技術の向上につながるプロジェクト課題を80%以上設定する。	栽培・飼養管理について、プロジェクト課題を学生の今後の進路を想定して実施した。研究部門との連携により、年間を通じて実践することにより、農業技術を習得することに努めた。	A	A	プロジェクト課題の設定に当たり、成果の数値化のために更に研究部門等との連携を行う。 また、他コースとの連携により、年間を通じた栽培管理と技術習得の機会を増やす。
2 「農大祭」や「きのべ市」で販売する野菜や加工品、花苗等の栽培方法、機能性や調理方法等について学習する時間を設け、十分な知識を習得させる。	農産物の栽培・貯蔵・流通・調理法等に対する学生の知識に関する調査を、来客に対し実施するとともに、生産現場の視察研修や実践を授業時間を活用して実施し、理解度を80%以上とする。	「農大祭」、「きのべ市」で販売する果実、野菜、花きや加工品等の栽培方法や生産現場の視察研修について授業時間を活用して実施し、技術習得に努めた。	A	「農大祭」、「きのべ市」での販売は限界があるため、他コースとの連携により、販売網の拡充を図る。		
3 地域の特色を活かした作目の課題を解決するための高度かつ専門的な栽培・飼養技術を実証するとともに、その技術の有用性を、作目の需要や生産効率なども含めて総合的に判断する力を育成する。	地域に貢献できるような課題解決プロジェクトを1課題以上選抜し、その成果を地域に発信する。	地域に貢献する課題解決プロジェクトについて学生が取り組み、その成果を農大HP、センターニュース、石井CATV等を通して地域に発信することを視野に計画を立てている。	A	野菜では家業を基本としたプロジェクト課題となってきたが、地域社会を想定した栽培品目について選定していくことも想定した取り組みが必要である。		

コース変更により次年度は無し



課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
⑤ 農作物の付加価値販売につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成(6次産業ビジネスコース1年次)	1 学生プロジェクトにおいて、「6次産業化」を視野に入れた新たな農業ビジネスモデルを研究・実践し、成果を卒業論文に盛り込む。	プロジェクトで「6次産業化」を視野に入れた農業ビジネスモデルの研究に取り組む学生を50%以上にする。	2月時点の調査では、コース所属の1年次9名のうち77.8%が6次産業化を視野に入れた取り組みを計画していると回答しているが、実際にはほぼ全員が何らかの形で6次産業化＝新たな付加価値創造に向けた取り組みを行う計画となっている。	A	A		商品開発に向けた感性が磨かれるよう6次産業体験学習等の機会の充実を図る。また、六次産業化研究施設を活用し、学生の創意工夫を生かした農大定番商品の創出等に向けた取組をさらに推進する。
	2 学外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や社会のニーズを把握、分析し、商品開発や販売戦略等に活かす。	プロジェクトで市場ニーズの調査を行う学生を50%以上にする。	プロジェクト活動において商品開発を行う者全員が、販売研修や6次産業体験学習等の機会においてアンケートや消費者との交流や、業者との意見交換等の機会を設けるよう計画に位置付けている。	A			各自のプロジェクトテーマに関連する品目について、市況や販売形態等の把握を目的とした量販店や産直市等の視察や消費者ニーズを目的としたアンケート調査等を行うよう指導する。
	3 コース実習、卒業論文等の課題解決の過程に「プロジェクトマネジメント」、「ブレインストーミング」等の各種の手法を習得させる。	1つ以上の課題解決のための手法を利用できるようになった学生を80%以上とする。	コース演習の時間を活用する等して、プロジェクト計画における商品開発や販売戦略を考案するために討議の場を設けたが、マネジメント手法等を身に付けさせるにはさらなる指導強化が必要である。	B			農大定番の商品開発に実施したブレインストーミングを継続するとともに、PDCAサイクルの実践の徹底等プロジェクトマネジメントの指導を強化する。
課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
⑥ 地域農業への寄与のための体制づくりと、研究成果や学生生活動に係る積極的な情報発信	1 平成24年度より導入した加工関連講座を充実させ、商品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	コースや模擬会社において、加工品を2品以上試作し、地域に発信する。	昨年学生プロジェクト研究で連携した徳島市内のジャム工房が、引き続きパッションフルーツの原料購入を継続してくれており、地域へのパッションフルーツの栽培普及と情報発信の起点となりつつある。 学生プロジェクトで加工品を30品試作、うち20品を販売した。	A	A	PRビデオの学生の表情が非常に良く、学校評価アンケートにおける学校生活に対する満足度が94%と高い値になっている。こういった結果などを高校生にも紹介していくと良い。 高校の文化祭などにそらそうじゃが参加して販売活動を行う機会を増やせば、学生の生の声を高校生に聞かせたり、活動内容を知ってもらったりすることにつながると思う。	連携先のジャム工房からパッションフルーツ原料供給を通じて、農大、卒業生、新野高及び生産者の地域連携が仕組めそうである。 今後は、試作・販売品の品質向上と安定生産を図り、定番商品にまでレベルアップする必要がある。
	2 学生の研究や学校生活、「そらそうじゃ」の活動状況等定期的な広報等を作成する。また、農大HPその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、一般社会に対しても積極的に情報発信を行う。	教育活動に関する広報紙を年間12回以上作成して公開する。 HPを2週間程度で更新し、最新の情報を地域社会に発信する。	広報紙「Go!Go!農大2018」を毎月1回程度発行。校内に掲示し、農大HPにも掲載している。また、「そらそうじゃ」の活動をSNSで随時発信、メールマガジン「アシスト農大」にも取り組んでいる。全農徳島HPにバナーで紹介していただいている。農大HPは微細な更新を入れると年間100回程度行っている。プロジェクト課題一覧が農大HP見ることができるとなった。さらに石井CATVへの情報発信も平成30年度から行っている。	A			農大のプロジェクトについての取り組み紹介を更に積極的に行う。
	3 本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	高校訪問を年間2回以上行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加する。 また、義務教育や高等学校の依頼があれば、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力する。	高校訪問を年間2回行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加した(年間13回)。 また、高等学校農業クラブリーダー研修会及び緑の学園等、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力した。	A			高校ガイダンスについては、農大ならではの体験型模擬授業になるような工夫と配慮が必要である。 キャリア教育に関しては、受け入れだけでなく、訪問についても考えていきたい。